

同一人格にやどる「聖母」と「魔女」

－ James Joyce の “Clay” (*Dubliners*) における《麻痺》の様相 －

梅 津 義 宣

‘The Holy Mother’ and ‘The Witch’ Who Dwell Together in the Identical Personality

－ A Phase of Paralysis in James Joyce’s “Clay” (*Dubliners*) －

Yoshinobu Umetsu

Abstract

Carl Gustav Jung (1875-1961) once commended James Joyce for his remarkable insight into the female psyche. He praised the ‘Penerope’ chapter (an episode of *Ulysses*) in a letter to Joyce, as ‘a string of veritable psychological peaches …’. From then on a lot of new understanding of women’s role in Joyce’s literature, and not a few critics have sought to provide fresh descriptions of Joyce’s female characters. This paper belongs to such trend of literary criticism. The purpose of this paper is chiefly to look into the motif of ‘paralysis and double personality’ in “Clay” (*Dubliners*). Paralysis is not only ‘personal (or local)’ mental sickness but also the universal condition of spiritual disorder.

Key Words

Catholicism, deficiency, double personality, image of the Holy Mother, paralysis, Protestantism, self-absorption, universality, witch-like proclivities, women in Irish society

I. はじめに － 短篇 “Clay” の成り立ちとその文学的特性 －

James Joyce (1882-1941) の文学作品群の中でも〈試技的作品〉と位置づけられる短篇集 *Dubliners* (1914年6月に出版:15篇の短篇を収める) の中で10番目に掲載される “Clay” は、所謂、第3グループ「壮年期」を形成する短篇で、そのほとんどが口語調のくだけた文体で書かれている。

この物語の主人公 Maria は、一見、単純素朴な人柄を有し、外見も貧相で、「とっても小さい人物」(a very, very small person) として登場する。しかも彼女は、「聖母マリア」と「魔女」のイメージを併せ持つ女性でもある。奇妙なことに、*Dubliners* の物語の中に登場する女性たちの中で、一見「満足そうに」生きているのはこの Maria 唯一人とも言える。しかし、この物語の文学的特性と作者 Joyce の意図を踏まえて批評的に読むならば、Maria の〈一見満足そうな生き様〉はあくまでも表面的なもので、実際は、(人柄こそ) 善良で素朴ではあるが、臆病な未婚の年配の女性にすぎない。物語の中で「小さい」ことが強調されるが、この「小ささ」は単に彼女の体躯の小ささを表現しているのではなくて、Maria の「主体的に生きる意欲の乏しさ」「総体的な人間力の貧しさ」などを暗示していると考えられる。さらに、このよ

うな彼女の姿は、夫、子ども、家庭、ひいては人生の喜びとか、ロマンスといったものへの果たしえぬ夢を一途に追い求め続ける姿そのものでもある。Mariaには、人並みに結婚し、幸福な家庭を持ちたいという（密かではあるが強烈な）願望がある。彼女は現実を見詰めることをせず、自らが思い描く虚構の世界に住んでいる。悲劇はそこにある。このような彼女の内面的・外面的様相を象徴するかのよう、物語全体の音調は、「欠如」を内包する皮肉な冷笑の響きと和合している。「欠如」とは、「人間相互の愛の欠如」に他ならない。物語のタイトル（“Clay”：「土くれ」）そのものは、《ことば》として文中で用いられることはない。このことは《ことばの非存在》が読者の直覚的印象によって却って鮮烈に感じ取れることを保証しているとも言えるだろう。

本論文の目的は、James Joyceの短篇集*Dubliners*の底流となっているモチーフ《麻痺》(paralysis)の様相を一短篇“Clay”を文学的に考察することによって明らかにすることにある。とりわけ、モチーフ、構成、文体、時代的・宗教的背景などの面から相互的な連関性を持たせて研究を進めたいと考える。

Joyceは、20世紀初頭のダブリンに生きる一人の女性の〈ある一日〉を冷静に観察することによってダブリンの市民の《麻痺的状况》を描き出している。《麻痺》は個人的な病的様相にとどまらず、また特定の地域にかぎって蔓延する病状でもなく、人類すべてに普遍的な危機的病態であるというJoyceの主張は注目すべき文学的特性である。この「普遍性」とは、彼自身が民族や地域や時代に密着した題材を追及するという一貫した手法からくるもので、ノルウェーの劇作家・詩人Henrik Ibsen (1828-1906)から学び取ったものと考えられる。また*Dubliners*を執筆する前から故郷を離れて異国の地域を放浪していたことも、彼がダブリン(アイルランド)を客観視できた大きな要因であったとも考えられる。

Ⅱ. 混濁する Maria 像 — 「聖母マリア」と「魔女」のイメージ —

短篇“Clay”は、主人公Mariaが「夕刻の外出」(evening out)を心待ちにしている場面描写から始まる(その様子は引用文(1)に描き出される)。作者James Joyce特有の「一日の終わり」という時間設定がここでもなされる。Mariaの住み込んでいる洗濯屋(the *Dublin by Lamplight* laundry)は、プロテスタントの経営する特殊な更生施設で、労働者は身を持ち崩した婦人たちが主である。Mariaはこの洗濯屋の台所の良い働き手である。台所は「ピカピカ(spick and span)」で、火は「赤々と燃え(the fire was nice and bright)」、大きな銅釜は「姿が映るぐらいだ」と、ここの料理長は褒めてくれる。彼の「曇みかけるような語勢の籠められた」褒め方は、Mariaの働きぶりが誰の目にも明らかであることを証明している。サイド・テーブルの上には「万聖節前夜」に食べる慣わしになっている乾葡萄入りのケーキが4つ置いてある。まだ切っていないように見えるが、近づいてよく見るとケーキはやや厚めに平等にナイフが入れている。引用文(1)に示される「見える」(you could see; seemed; you would see)と反復される表現は、今はMariaの目にも、読者の目にも見えてはいない「あること」がやがて見えてくることを暗示している。この一見単純そうな短い物語は、読者から作品の深層にも触れる多角的な洞察を引き出すと同時に、主人公Mariaの盲点を浮き彫りにする仕掛けが施されている。それを一つ一つの確に読み解いてゆくのがJoyce文学の核心に迫ることになるのである。

- (1) The matron had given her leave to go out as soon as the women's tea was over and Maria looked forward to her evening out. The kitchen was spick and span ; the cook said you could see yourself in the big copper boilers. The fire was nice and bright and on one of the side-tables were four very big barmbracks. These barmbracks seemed uncut ; but if you went closer you would see that they had been into long thick even slices and were ready to be handed round at tea. Maria had cut them herself. (下線筆者) (p. 120)

次の場面（引用文2）で、Mariaの「とっても小さい姿」（a very, very small person）が読者に紹介される。このような同語反復を用いた文体は、〈全知の語り手〉である作者の説明文であるにもかかわらず、幼児向きのお伽噺の文体となっている。この「小ささ」は、数ページにわたって《ことば》を換えて繰り返され強調される（little, tiny, tidy, small, diminutive）。さらにMariaは「非常に長い鼻と、非常に長い顎」をもっていることが描き出される。このような多様な繰り返しは、「魔女の呪い」を想起させ、物語冒頭で言及された「夕刻の外出」の行為も合わせ、「魔女」のイメージを一層鮮やかに印象付ける。「少し鼻にかかった話しかた」という描写や引用文（1）の「銅製の釜」（copper boilers）なども魔女としての連想を強めるのに貢献している。さらには、この後で“Maria laughed again till the tip of her nose nearly met the tip of her chin…”（p. 122）という類の表現が再び繰り返され、「魔女」の印象がさらに強められている。

つづいてMariaが「平和の実現者」であることも明白にされる。この特殊な洗濯屋で働く人々の間で諍いが起きると、彼女は「実に良い仲裁役」（a veritable peace-maker）だと褒められる。ここではMariaの名前はごく自然に「聖母マリア」を想像させる。

- (2) She talked a little through her nose, always soothingly : ‘Yes, my dear,’ and ‘No, my dear.’ She was always sent for when the women quarreled over their tubs and always succeeded in making peace. One day the matron had said to her :
‘Maria, you are a veritable peace-maker!’ (下線筆者) (p. 120)

Mariaは、常に控えめで、目立たない生活をし、何の不満も抵抗も示すことがない。自己抑制の傾向が顕著である。職場内部の揉め事の仲裁者では在りえても、別に威厳ある調停者と思われるわけではない。この文脈には、Mariaの穏やかな人柄をうまく利用して陰悪な職場の雰囲気や和らげようとする部署の婦人監督（the matron）のしたたかな意図も垣間見られる。ここで働く洗濯女たちにとっても、結局のところ、Mariaは「洗濯屋」という名の限られた「生活空間」での「平和の実現者」にすぎないのである。

“a veritable peace-maker”という表現は「マタイによる福音書5章9節」を想起させる。この箇所は11月1日の「諸聖人の祝日」のミサ聖祭で朗読される聖句である。“Maria”の名前は、ごく自然に“Mary, the Holy Mother”を読者に連想させることは確かである。「平和の実現者」としてのMariaの役割は、聖母マリアの称号の一つ「平和の元号」にも通じるところがある。さらに、この後Mariaが「諸聖人の祝日」の早朝ミサに出るために前の晩に（慎重に）目覚まし時計をセットする場面が述べられることによって、両者（MariaとMary, the Holy Mother）の密接な関わりが強調的に描き出される。身を持ち崩した過去のある婦人も少

なくないこの職場にあって、Mariaはまさに「聖女」としての役割を果たすことが求められている。正真正銘のカトリック教徒である彼女を取り巻く内面的・外面的要因が相互に絡み合っていて、彼女に独特の《自己陶醉》や《自己満足》の感覚を与えているとも読み取ることができる。(また、この文脈には“独身のMaria”と“the Blessed Virgin Mary”の皮肉な並列が見られるのも明白な事実である。)

Mariaの現実の姿はと言えば、「平和の実現者」とは名ばかりで、非力であり、陰でからかう洗濯女たちにとっては「一種のペット」のような存在にすぎない。この類の人間は、究極的には、他人から重んじられることはない。何かの役に立てば利用されるが、その価値が無くなれば、「ほろきれ」のように捨てられるのが落ちである。Mariaは所詮その類の女性である。しかし、不思議なことに、Mariaは自分の置かれている現状に不満を持つこともなく、物語の最終部で惨めな挫折感を味わうようなこともない。ここで、とりわけ、作者Joyceの視線に留意したい。安易な自己満足を感じつつ問題意識を抱くこともないMariaやその類の女性たちに向けるJoyceの目は実に鋭く、冷たく、そして厳しい。

ところで、このようなMariaにも、かつて乳母をしたことのあるJoeとその家族の存在がある。Mariaにとって安らぎを感じ取れる唯一の「かけがいのない家族」である。Joeは何度も「ここに来て一緒に暮らそう」と言ってくれたし、“Maria is my proper mother” (p. 121) とさえ言ってくれた。それに、Joeの奥さんのDonnelly夫人も優しくしてくれる。しかし、最近、Mariaが一家を訪問したとき、Joeの優しい振る舞いは「表面上」のものであることに気づき、彼女の人格は無視され、心が傷つけられてしまう。Joeの態度には明らかに《独断的なエゴイズム》が隠されている。Donnelly夫人も、〈一見〉親切そうに対応してくれてはいるものの、どこか他人行儀で仰々しい態度が見え隠れする。また、こともあろうに、あのJoeとAlphyが互いに反目し合っている。皮肉なことに、Mariaに与えられた「平和の実現者」という芳しい称号は、この二人の兄弟やDonnelly夫人の態度によって灰燼に帰してしまう。

Ⅲ. Mariaの生活の現実 — 彼女の内面に巣くう二重性 —

物語には、続いて、Mariaの〈意識の流れ〉をとおして、彼女の置かれている現実的生活の状況が鮮明に描き出される。彼女の「内的独白」の形で語られるパラグラフに注目したい。

- (3) After the break-up at home the boys had got her that position in the *Dublin by Lamplight* laundry, and she liked it . She used to have such a bad opinion of Protestants but now she thought they were very nice people, a little quiet and serious, but still very nice people to live with. …… There was one thing she didn't like and that was the tracts on the walls ; but the matron was such a nice person to deal with, so genteel. (下線筆者) (pp. 121-122)

引用文(3)では、プロテスタントの人たちを“(very) nice”を三度も修飾して、その人柄の良さを強調している。しかし、もちろんMariaの〈プロテスタントを肯定する言語表現〉の裏には、あくまでも「宗教的教理の違いは別として」というニュアンスが潜在していることは明らかである。生まれながらカトリックの環境で育ったMariaはその教義を信じきっている。「カトリシズム」は彼女にとっては、変えがたい習慣として確実に位置づけられている。他の

宗派には関心を抱くこともなく、好意や妥協の気持ちを寄せることなどは微塵もない。しかもプロテスタントが圧倒的多数を占めるポールズブリッジ（ダブリン南東部）で働いている。彼女の働き場である洗濯屋の人たちも良い人たちである。「（プロテスタントの信者たちが壁に掲示する）宗教パンフレット」以外は別に気に食わないものはない。二つの宗派の〈はざま〉で揺らぎながら自己確立をはかる Maria には孤独と不条理と《麻痺》の影が落ちている。

ところで、この物語は冒頭から“nice”とか“good”というような《ことば》が頻繁に使われ、それが物語の文体的特徴の一つとなっている。しかし、この類の《ことば》の連発は冗長すぎて却って説得力を失ってしまう。Maria が自らの視点で“very nice”などと繰り返し強調すればするほど、彼女の「見えない部分」、「敢えて見ようとしな部分」、「生活の中で充足されていない部分」が互いに織り重なり、〈はざま〉で悶えもがく麻痺的情况に在る彼女自身の姿が、ある種の文体的相乗効果を得て、読者の目に浮き彫りになってくる。

Maria の職場の一場面が次のように描写される。

- (4) When the cook told everything was ready she went into the women's room and began to pull the big bell. In a few minutes the women began to come in by twos and threes, wiping their steaming hands in their petticoats and pulling down the sleeves of their blouses over their red steaming arms.

（下線筆者）（p. 122）

食卓の準備ができると、Maria は大きな鐘を鳴らし、洗濯女たちを呼び寄せる。一風変わったこの婦人更生施設の名称（the *Dublin by Lamplight* laundry）は、Brewster Ghiselin が指摘するように、「靈魂を洗いきよめ、光を灯す」の意味を示唆している。ここで働く女たちは、それぞれ「湯気の立つ手を拭き」「赤く湯気の立つ腕に袖をおろしながら」食堂に入ってくる。ここでは“steaming”という《ことば》が2回繰り返される。作業後、女たちが汚れた手を温水で洗った後、食堂に向かう様子である。……《湯気の立つ》手や腕……“steaming”は音声的にも「清々しい活力」を漂わせ、〈自浄〉を希求する彼女たちの願望、ひいては〈更生〉を目指す爽やかな意欲を象徴している。文字どおり、また比喩的にも、汚れた衣類や布地を洗浄する Maria は彼らと協力しながらこの作業をつづけている。読者は、ここに、「Maria 自身」と「聖母マリア」のイメージを重ねて読むことができる。

このあと Maria は乾葡萄入りのケーキを各自に4切れずつ分配する。ここでは、「万聖節前夜」のパーティーが真近いことが仄めかされる。物語のこの文脈の中で、職場の副主任（Lizzir Fleming）が「きっと Maria には指輪が当たるわ」という。（指輪は結婚の秘跡を象徴するものである。）これを聞いて Maria は「指輪も夫（いい人）も要らないのですよ」と笑いながら言うほかない。Maria が笑うとき、その灰緑色の目が失望とはにかみが入り混じってキラキラ光り、鼻の先端がほとんど顎の先端に届きそうになる。まるで「風刺画」のように描かれる「魔女」にも似た Maria の風貌は3度読者の目に晒される。小柄な体躯で「はじけそうになるほどよく笑う」Maria は、羞恥心と潜在的な憧憬を思わず表に出してしまう。しかし、Maria がこの物語の中で話す《ことば》は、きわめて少なく、自分自身の願いや思いを語ることも、その中味を素直に認めることさえ拒んでいるようにさえ見えてくる。

職場でのお茶の時間が終わると、Maria は小踊りして「自分の小さな寝室」へと急ぐ。彼女にとっては「かけがえのない小さな空間」である。いつもの「夕方の外出」のために外出着に

着替え、鏡の前に立つ。年は取っても、やはりきれいで清潔でありたいと思いつつ自分の「小さな体」(a nice tidy little body)を奇妙な愛情を込めて眺める。(自己の女性らしさを自認する姿勢は失われていない。)[万聖節前夜]のパーティーのゲームの一つ「鏡に映る未来の夫を見る」遊びが仄めかされる。Maria自身は自分の理想化された姿を見るだけである。顔は見ない。自分自身に正面から向き合うことなく理想化された姿を捜し求めるだけである。子供のように小さな姿の中に、不快な体験や見たくないものを閉じ込めてしまっている。自分自身の現実的情况を的確に知ろうとする姿とは全く対極的なMariaの内面の状況が映し出される。また、前向きに大胆な一歩を踏み出せないMariaの姿がここに浮き彫りにされている。

IV. Mariaの人格の二重性と《麻痺》の様相

「翌朝のミサのはじまる時刻に合わせて慎重に目覚し時計の針をまわす」という素朴で信心深いカトリック教徒Mariaの様子には、どこか彼女の敬神の対象である「聖母マリア」の漂いが行き渡る。Mariaは「万聖節前夜」のパーティーに備えて買い物に出かける。「万聖節前夜」とは、古いケルトの暦ではあらゆる精霊や妖女が巷を彷徨するという民族的信仰に起源を持つ祭りの一つである。また「万聖節前夜」は「魔女が出歩く夜」とも信じられている。しかし、Mariaが明確な「魔女」の特性を持っているとは断定できない。ただ彼女をめぐる外面的な状況の中に「魔女に似た様子」が暗示されているだけである。ネルソン・ピラー行きの路面電車は混んでいて、Mariaは一番後ろの席に、爪先がやっと床に届く格好で腰をかけ、お金を持っていることはいいことだと思う。「だれの世話にもならないで、自分の楽しい夕べ (her nice evening) の過ごし方」について思いを馳せる。Mariaは限られた狭隘な人間関係と貧相な立場にしがみつきのながら、ただ漠然と〈自己確認〉と〈自己充足〉に憧れている。彼女自身は、その矛盾した認識に気付くことはない。JoyceはMariaの人格と認識の中に存在する「幼稚さ」を持つ人物像を巧妙に設定している。その「幼稚さ」は〈自己確認〉とは程遠い位置に在ることは明白である。

Mariaは繁華街の雑踏の中を急ぎ足で歩き、Joeの子供たちのために「何か本当にいいもの」(something really nice)を買おうとする。1ペニー菓子を取り混ぜて全部で1ダース買い求めて「大きな包み」を抱えて、ようやく店から出る彼女の姿は、その身体の「小ささ」が却って一層強調されることになる。

- (5) She bought a dozen of mixed penny cakes, and at last out of the shop laden with a big bag. Then she thought what else would she buy: she wanted to buy something really nice. They would be sure to have plenty of apples and nuts. It was hard to know what to buy and all she could think of was cake. She decided to buy some plumcake but Downes's plumcake had not enough almond icing on top of it so he went over to a shop in Henry Street. (下線筆者) (pp. 123-124)

引用文(5)では、“buy”という語が4回繰り返される。この繰り返しはMariaの「小さなもの(こと)への単純な執着」、「限られた狭い視野」、よく言えば「ひたむきな態度」などが暗示的に映し出されている。

この文脈の流れの中で、Mariaはこのお菓子屋の若い女店員に「ウェディング・ケーキがお入用なのですか」と尋ねられる。Mariaは、空ろな状態でウェディング・ケーキを見詰めていたのかも知れない。結局は、顔を赤らめながら、微笑を浮かべ、「プラム・ケーキ」の分厚い一切れを買うはめになる。(予期せぬ出費である。) Mariaの潜在的結婚願望と現実との〈ずれ〉を起因とするチグハグな行動様式の表われとも理解できるだろう。

Donnelly家に着くと、Mariaは迎えに出てくれた子供たちに1ペニー菓子を手わたした。しかし、Joeとその妻のためにと心に決めてヘンリー・ストリートのお菓子屋で買い求めたプラム・ケーキが見当たらない。

- (6) Then she asked all the children had any of them eaten it – by mistake, of course – but the children all said no and looked as if they did not like to eat cakes if they were to be accused of stealing. Every body had a solution for the mystery and Mrs. Donnelly said it was plain that Maria had left it behind her the tram. (p. 125)

久しぶりの再会で心和む一時であるはずなのに、Mariaは何という情知らずの詰問を子供たちにしてしまったことか。プラム・ケーキを置き忘れただけでなく、どうやら子供たちとの付き合い方まで忘れてしまったようである。Donnelly夫人が言うとおおり、確かにMariaはここに来る途中、ダブリンの北に向かうドラムコンドラ行きの路面電車の座席にケーキの箱を置き忘れたような気がする。あの時、「陸軍大佐のような風采」の老紳士が、Mariaに親切に席を空けてくれ、話しかけてくれた。二人の話題は、雨模様の天気のこと、「万聖節前夜」のこと、子供たちへのお土産のことなどで、愉しく会話が弾んだ。Mariaは、あの時、なぜか有頂天になっていたのだ。－（「こんな私だって立派な紳士と話せるのだ!!」）－あの時、確かに、自分があの老紳士と席を同じくしたために正常な平衡感覚を失っていたことを今になって思い出し、Mariaは羞恥と困惑と落胆とで赤面するのである。

隣近所の子供たちが「万聖節前夜」のゲームを準備し、3つの皿が置かれる。Mariaも未来を占うゲームに誘われる。

- (7) They led her up to the table amid laughing and joking and she put her hand out in the air as she was told to do. She moved her hand about here and there in the air and descended on one of the saucers. She felt a soft wet substance with her fingers and was surprised that nobody spoke or took off her bandage. There was a pause for a few seconds ; and then a great deal of scuffling and whispering. Somebody said something about the garden, and at last Mrs. Donnelly said something very cross to one of the next-door girls and told her to throw it out at once : that was no play. Maria understood that it was wrong that time and so she had to do it over again : and this time she got the prayer-book. (下線筆者) (pp. 127-128)

個人の運命を占う「万聖節前夜」のゲームでは、各々の皿にのせられた〈指輪〉は《結婚》を、〈祈祷書〉は《修道院》を、〈水〉は《生命》を、そして〈土〉は《死》を象徴的に意味している。Mariaはこの占い遊びで二つの運命を予言的に示されることになるが、不吉なことにその

二つとも彼女の死を暗示する。Mariaは、子供たちが無分別に置いた「柔らかい湿ったもの」(a soft wet substance)に触れた時、それを直感的に〈土〉と連結させてしまう。それは「彼女の余生が永くはなく、哀れな生涯を終えて〈土〉の中に埋葬される」という宿命的預言と結び付く。Mariaが(皆の配慮でやり直して)次に掴む〈祈祷書〉は、文字どおり《修道院生活》を暗示する。しかし、それはMariaが「そのまま修道女になる」というよりも、正常な人生の行路から外れた場所とも言える今の洗濯屋での善良と禁欲と敬神だけの現状の生活が、即ち「この世界から隔離された場所で生きること」、ひいては「生きたままでの死」であることを意味するのであろう。しかも年齢を考えれば、洗濯屋から解雇されるのも時間の問題である。その後自分を引き取ってくれる家族などあるはずもない。(確かにDonnelly夫人の語りの端々にもそのことが示唆される。)とりあえず自分に残された道はあの《洗濯屋》でしかない。Mariaは自分に言い聞かせる。

私たち読者は、単にMariaの現在の孤独な境遇だけでなく、彼女の悲惨に満ちた過去と不確実な未来をも推測する。そうした〈Mariaの姿〉は、まさに「生ける屍の生活」を送る全てのダブリンの市民に共通する姿であると言えるだろう。“Clay”という物語のタイトルもそれを暗示しており、「死の影」は《麻痺》と重なり合いながら本作品全体を覆うモチーフとなっている。

V. おわりに — 《麻痺》という普遍的な文学的アプローチ —

作者James Joyceの文学的功績を彼の主観的観点に見出すことはごく自然なことである。すなわち〈個人〉を〈人類文化総合体〉と結合させてみせる手法である。これはアイルランド人であるダブリンの市民を描きながら実は全人類の問題をとらえ得たことを指している。一個人の自我を徹底的にリアルに追求することによって、全ての人間に共通の特質に触れてゆくのである。たとえアイルランドという民族や地域社会、そしてダブリンの市民たちを描いてはいても、実は全世界の人間に共通のもの、普遍的なものを描いているのである。このような文学研究の手法を「リアリズム文学的接近」と言い換えることもできるだろう。

“Clay”というこの物語のタイトルは象徴的な意味をもつことは明らかである。それともこの物語の元の題名は“Hallow Eve”であったことは注目に値することである。亡霊が姿を表わし、死者の霊が土の中から起き上がると信じられている夕べである。Mariaは《水》を象徴する「洗濯屋」を出て、〈東〉から〈西〉に向かって移動する。この行為は「生命」から「死」へと向かう象徴的な行動とも理解できる。洗濯屋とDonnelly一家はMariaを受け容れてくれる数少ない「囲い」である。そこでは、彼女もまた「平和の実現者」「いいお母さん」として受け容れられている。しかし、この段階で彼女が自己満足や自己陶醉に陥っている姿に作者Joyceの冷ややかな視線が向けられる。

人間の切なる声を聴いてくれると信じられる「聖母マリア」のイメージ。他者との関係を持ちきれず、自己陶醉の傾向に走るMariaは「何事も実現できない挫折感」と「素朴な人間の夢」の《はざま》に揺れ動く主体性を欠いた弱い人間存在にすぎない。作者Joyceは、率直で脆弱なこの独身の女性に一片の同情を寄せることもなく、終始、彼女とその周辺を冷静な目で見詰め、しかも写実的な表現で作品を書くことに徹している。この主人公Mariaの長い人生の中の〈ある一日〉という短時間を鋭く観察することによって、彼女の救いようのない《麻痺的

況》を暴き出している。Joyce が主張したいことは《麻痺》の根源は、Maria 個人の内面に潜むものではなく、全ての人間が抱いている〈人間相互の愛の欠如〉という普遍的な病相にほかならないということに尽きるのである。

物語“Clay”に示される《麻痺》という普遍的病相への作者の峻厳な文学的アプローチは *Dubliners* が収められた全ての短篇に通底するものである。とりわけ《麻痺》や《エピファニー》のモチーフは物語の究極的課題である「宗教（カトリシズムとプロテスタンティズム）と芸術（文学）の関わり」をはじめ「人格の二重性」「人間の倫理性」「死生観」「輪廻転生」「文学の神話化」などとも絡み合うものである。これらの（文学的主題に関わる）根元的諸命題はやがて畢生の大作 *Ulysses* および *Finnegans Wake* に凝縮され、その独自の手法とともに、文学者 James Joyce の文学的特性を鮮明に示すものとして全世界の読者の脳裡に刻みつけられることとなるのである。

【付記】

- Text は James Joyce, *Dubliners* (London : Grant Richards Ltd. Publishers. 1914) を使用した。

Bibliography

- Beck, Warren (1969), *Joyce's Dubliners : Substance, Vision and Art*. Durham N. C. : Duke University Press.
- Ellmann, Richard (1982), *James Joyce*. (New & Revised Edition) Oxford : Oxford University Press.
- Ghiselin, Brewster (1968), "The Unity of Joyce's *Dubliners*", *Twentieth Century Interpretations of Dubliners*. (Garette, Peter K. ed.) Englewood Cliffs N. J. : Prentice Hall Inc.
- Gifford, Don (1982), *Joyce Annotated*. Berkeley, University of California Press.
- Henke, Suzette A. (1990), *James Joyce and Politics of Desire*. New York · London : Routledge.
- Henke & Unkeless (1982), *Women in Joyce*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Herr, Cheryl (1996), *Joyce's Anatomy of Culture*. Illinois : University of Illinois Press.
- Leonard, G. W. (1993), *Reading Dubliners Again : Laucanian Perspective*. New York : Syracuse University Press.
- Mahaffey, Vicki (1995), *Reauthorizing Joyce*. Gainesville · Miami · Jacksonville : University of Florida.
- Parrinder, Patrick (1984), *James Joyce*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Tindall, W. Y. (1959), *A Reader's Guide to James Joyce*. New York : Noonday.
- Wales, Katie (1992), *The Language of James Joyce*. London : Macmillan Education Ltd.

